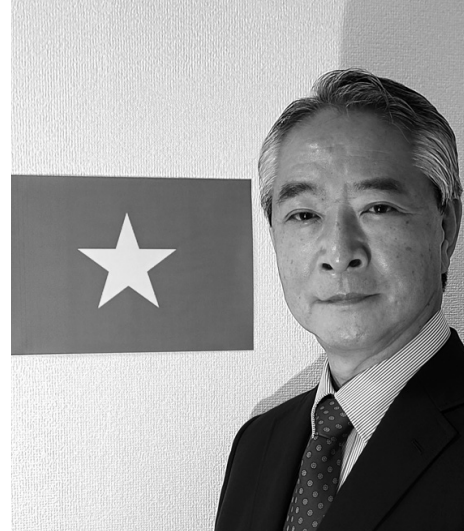


日本人が知るべき親日の歴史（第6回）

ベトナム（上）

株式会社せおん 代表取締役
株式会社テイク・グッド・ケア 代表取締役

越 純一郎



親日国との関係史では、下記視点が重要である。

- ① 親日性の歴史的背景
- ② 当該国との関係に関する現代的課題

史的転換点にあるベトナム

ベトナムに関しては、②が特別に重要である。なぜなら、**ベトナムの外交、経済、日越関係は、歴史的転換点にあるからだ**。つまり、ベトナムについては現代史が最重要テーマである。【以下、主なA14などは関連資料と該当頁】

中国は、ベトナムにとって宿命的脅威（B106）

ベトナム史は、「中国に対する抵抗の歴史」である。ベトナム諸都市に「チャンフンダオ通り」として名前の残るダオ将軍などの歴史上の英雄の大半は、中国と戦って勝利した指導者たちである。

ベトナムは939年まで「中華帝国」に支配され、その後、フランスの植民地となるまでの間も、中国から10回以上の侵略を受け、そのたびに中国を跳ね返した。ベトナム史とは、国の存亡をかけた中国との闘いの歴史なのであり、これが国民意識の根底にある。

現在も続く、中国によるベトナム侵略（A50）

ベトナム戦争末期の1974年、米軍撤退後の「力の空白」に乗じた中国は、宣戦布告なしの奇襲攻撃で、西沙諸島の南半分をベトナムから武力で奪った。中国の南シナ海進出が始まったのだった。現在も中国はこれらの島々を奪ったままだ。

次いで、1979年、第三次インドシナ戦争で、中国の支援するカンボジアの赤色クメールと、ベトナムの主力部隊がベトナム南部等で戦闘中に、戦力が手薄になったベトナム北部国境3か所から、突然、中国軍が侵攻してきた。極端な毛沢東思想に影響された赤色クメールは、自国民300万人を虐殺し、更にベトナム国民数十万人も虐殺した。

更に、1988年、冷戦末期に南シナ海からソ連のプレゼンスがなくなった際に、中国は武力で南沙諸島の6つの環礁をベトナムから奪った。

2014年には、ベトナムのEEZ内で中国が石油リグ設置を武力で強行した。ベトナムの公船を中国は一蹴した。この時は、ベトナムで激しい反中運動や、中国企業の襲撃が生じて、中国はリグ船を引き揚げた。

現在、中国は最大の貿易相手国だが、対中警戒心は強い。ファーウェイも、事実上、排除している。

2014年の歴史的転換 → 米国はベトナム重視に

2014年、中国は1988年にベトナムから武力で奪った南沙諸島に人工島を造成し、軍事拠点化を本格化した。これが歴史的転換の契機となった。これによって、米国も諸国も対中警戒感を一気に高めたからだ。

まず米国は、2015年に航行の自由作戦を開始。翌2016年にオバマ大統領がベトナムを訪問し、武器輸出を完全解除した。2017年、トランプ大統領もベトナム首相をアセアン諸国の中で真っ先に米国に招き、自らもベトナムを国賓として訪問した。翌2018年には、米空母のベトナム寄港が始まった。バイデン政権でも、国防長官が、また副大統領がベトナムを訪問した。

「米国のベトナム重視は明確である」と、梅田邦夫元駐ベトナム大使は述べている（B109）。

ベトナムの対日姿勢 — 日越は「自然の同盟」（A85）

梅田氏は、中国と宿命的に対峙するベトナムの対日姿勢が明確で一貫していることを、次のように語る。

- ① 2005年、日独印ブラジルの安保理改革案に関し、独、印、ブラジルに反対する国もあった

が、日本には中韓が反対した。この時、アセアン10カ国の中にも中国の圧力で方針が揺らぐ国もあったが、ベトナムとシンガポールだけが最後までブレずに日本を支持してくれた。

- ② 2010年、尖閣諸島付近で日本の巡視船に体当たりした中国漁船の船長を日本が拘束した際、中国は対抗措置として、日本企業フジタの社員4人を拘束し、レアアースの対日輸出を停止した。この時、ベトナム首脳は国内レアアース資源の共同開発を日本に提案し、日本政府関係者全員がこれに感謝した。

梅田氏に対して、ベトナムの歴史学会会長だった故ファン・フィ・レ氏は、「ベトナムにとって日本は最も信頼できるパートナー」であり、日本とベトナムは「自然の同盟関係」にあると語ったという(B104)。この発言は、ベトナム側の専門家の認識であり、日本へのメッセージでもあり、また地政学上の客観的現実とも言えよう。

「歴史的転換」以降、日本もベトナム重視

米国がベトナムに対する姿勢を転換した2014年以降、日本政府もベトナムへの姿勢を明確にしている。(A25、34、90～92)

まず、2016年、G7伊勢志摩サミットのアウトリーチにグエン・スアン・フック首相を招待し、これは同首相の外交デビューとなった。

翌2017年、天皇皇后両陛下は、在位中の最後の海外訪問として、ベトナムをご訪問された。このとき両陛下は、抗仏戦争(独立戦争)をベトナム軍とともに戦った残留日本兵のご家族16名と懇談され、埋れた歴史に光が当り、両国関係の新しい頁が生まれた。

同年、APECダナン首脳会議に合わせて行われたTPP11首脳会議で、ホスト国ベトナムは安倍総理に共同議長を務めてほしいと要請。日本側はこれを受け、両国の連携により、曲折はあったが、「閣僚レベルの合意」という成果を実現した。これにより、翌年末、TPPは発効した。

2019年の即位の礼に伴う安倍総理主催晩餐会では、安倍総理の右隣にベトナムのフック首相の席が用意された(左隣は中国の国家副主席)。

菅総理の初の外国訪問もベトナムだった(2020年)。翌2021年には、日本はコロナ・ワクチンをベトナムと台湾に寄贈した。両国とも戦略的脅威は中国である。

岸田首相も、最初の外遊である英国でのCOP26

の、僅か半日の現地滞在の時間を割いて、ベトナムのファム・ミン・チン首相と会談した。

「知る努力、知らせる努力」は大きな課題

資料Aによれば、安全保障担当の日本政府関係者や現役の外交官等でも、ベトナムについて全く誤った理解をしている方々、即ち、ベトナムを「中国の弟分」「強権支配の共産国」などと漠然と誤解している方々が珍しくないそうである(A11)。

そうした状態では、「ベトナム史とは中国との闘いの歴史であり、現在も中国が戦略的脅威」だということも、また、2014年の「歴史的転換」についても、十分に認識されていないのであろうと心配になる。

外交や安全保障の専門家でさえこうならば、ここに、ベトナムに関する明らかな「現代的課題」がある。この課題は、我々の努力と心がけで解決できるものだ。

日本人が知っておいて良いエピソードも多い

梅田邦夫元駐ベトナム大使は、ご著書などで、次の2つのエピソードを紹介されている。

- ① 日露戦争の日本海海戦前のバルチック艦隊の最後の寄港地のカムラン湾で、親日的だったベトナム人が補給などでサボタージュし、石炭に泥を混ぜたことが日本勝利の一因だったと伝えられる(A85)。
- ② 日本の2度目の蒙古襲来後、ベトナムを攻めたフビライに対し、ダオ将軍(前述)が壊滅的打撃を与えた。これも一因となって(E150)、日本は3度目の蒙古襲来を免れた。

これらにつき、梅田氏は「ベトナムは歴史上、日本を国難から二回救ってくれた」と述べている(B104)。

日本人がベトナムを身近に語るようになりたいものだ。それは両国の友好にも資するだろう。

関連資料

- A 梅田邦夫『ベトナムを知れば見えてくる日本の危機』小学館
- B 梅田邦夫「頼りになる友邦ベトナムの実像」月刊『正論』令和3年10月号
- C 坂場三男「ヴェトナム社会主義共和国」ワニブックス『愛される国日本』第6章
- D 田中孜(ホンバン大学名誉教授)『日越ドンズーの華ーヴェトナム独立秘史ーファン・ボイ・チョウの東遊(=日本に学べ)運動と浅羽佐喜太郎』明成社
- E 宮脇淳子『世界史のなかの蒙古襲来』扶桑社